東京新聞 朝刊 2020/09/21(月)

原発の惨禍 後世に

福島・双葉町 伝承施設が開館

「東日本大震災・原子力災害伝承館」で、福島第一原発事故の様子を再現した展示＝20日、福島県双葉町で

東京電力福島第一原発事故の記録を後世に伝える福島県のアーカイブ拠点施設「東日本大震災・原子力災害伝承館」が二十日、第一原発が立地する双葉町で開館した。事故直後の混乱と復興の歩みを後世に継承し、記憶の風化を防ぐ。

開館に先立ち、高村昇館長は「未曽有の原子力災害から福島がどのように復興してきたか知ってほしい」とあいさつ。最初の来館者となった東京都稲城市の会社員に、双葉町名産のだるまを手渡した。

伝承館は地上三階建てで、総工費は約五十三億円。六つのエリアに分かれ、震災や原発事故から復興に至る道程を時系列で紹介する。収集資料約二十四万点のうち百六十七点を陳列するほか、二十九人の語り部が自らの体験を伝えるコーナーも設けた。

来館者は冒頭、七面の大型スクリーンを備えたシアターで約四分間の動画を視聴する。事故の対応拠点となった福島県大熊町の旧オフサイトセンターに残されたホワイトボードも展示され、各自治体の避難先とともに赤字で書き込まれた「満杯」の文字が当時の緊迫感を伝えていた。

「なぜ事故に、伝えていない」

国・電力会社の責任 言及少なく

二十日開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」は、東京電力福島第一原発事故後の対応や復興の歩みに重点を置く展示内容となった。一部の専門家は「事故への反省の視点がなく、教訓がどこにあるか見えづらい」と指摘。伝承館がうたう「教訓の継承」に疑問を投げ掛ける。

「なぜ原発事故が起きたのか、肝心なことを伝えていない」。一時、全町避難となった浪江町から福島市に避難する今野寿美雄さん(五六)は伝承館を観覧後、憤った。

館内は、事故発生から復興までを時系列でたどる構成。だが、事故前に盛んにPRされた「安全神話」や、国と電力会社の責任についての言及は、ほぼない。

「伝承館」の外観＝小型無人機から

旧ソ連で一九八六年に起きたチェルノブイリ原発事故を伝えるウクライナ国立の博物館を研究する福島大の後藤忍准教授(環境計画)は「失敗の検証や反省なき教訓はあり得ない」と警鐘を鳴らす。

同博物館の日本語音声ガイドに出てくる約一万四千語を後藤氏が解析すると、最もよく使われたのが「放射線」だった。同じ文脈で「事故」「汚染」「死亡」といったネガティブな印象の言葉が使われ、事故や放射線被害の深刻さを際立たせている。

情報の隠蔽や対応が遅れた旧ソ連政府の責任も追及しており「原発事故を二度と繰り返してはならない」という強いメッセージが読み取れるという。後藤氏は「伝承館は復興を強調するあまり、第一原発事故の悲劇的な側面を伝えきれていないのでは」と危ぶむ。

第一原発がある双葉町に約四半世紀掲げられた看板「原子力 明るい未来の エネルギー」の標語を同町の小学生時代に考案した大沼勇治さん(四四)＝茨城県古河市＝は「実物を展示してほしかった」と落胆した。

事故後に安全神話への皮肉として注目された看板を、大沼さんは「負の遺産」として伝承館に置くよう要求。ただ、館内に設置されたのは看板を写したパネルだけだった。「写真では心に残らない。原発がもたらす明るい未来を信じたのに、古里を奪われた事実を伝えて」(大沼さん)

福島県生涯学習課の渡辺賢一課長は「記録に忠実な展示を心掛けた。失敗の洗い出しが主眼ではない」と説明。開館後も収集資料約二十四万点から随時、展示物を入れ替えるとする。

(c) . 中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。